opusdei.org

教皇「闘うべき最大 の貧困は、愛の貧 困」

11月15日、「貧しい人のための世界祈願日」が記念された。教皇はこの日バチカンで司式したミサの説教で、貧しい人々への奉仕へと信者らを招かれた。(VATICANNEWSから)

2020/11/17

(VATICANNEWSのリンク)

カトリック教会の「貧しい人のため の世界祈願日」が、11月15日 (日)、記念された。

この祈願日は、最も貧しく助けを必要とする人々に対するキリストの愛を、教会全体が具体的に証しすることができるよう、2017年、教皇フランシスコによって設立された。

今年で第4回目となった同祈願日を迎え、教皇フランシスコによるミサが、新型コロナウイルス感染拡大防止対策をふまえ、バチカン・聖ペトロ大聖堂の「司教座の祭壇」で、限られた参加者らと共に捧げられた。

教皇はミサ中、この日の福音朗読箇所、マタイ福音書の「タラントン」のたとえ(マタイ25,14-30)を取り上げ、説教を行われた。

このたとえ話は、主人が僕たちに 「それぞれの力に応じて」(マタイ 25,15)自分の財産を託すという「大 きな善」によって始まる、と教皇は述べた。

わたしたちの人生もすべては「神の 恵み」から始まり、御父なる神はそれぞれに異なる才能を託されなが ら、わたしたちの手の中に多くの善 を与えられた、と話された。

わたしたちはしばしば自分の人生に 足りないものだけを見て嘆くが、 「もし…があったならば」という幻

想は、神から与えられた善を見つめることを妨げ、自分の持つ才能を忘れさせてしまう、と教皇は注意された。

神はわたしたち一人ひとりをご存じである、と教皇は述べ、1タラントンを預けた僕にもそうされたように、わたしたちの弱さにもかかわらず、信頼のうちに恵みを与えられ、主の帰りを待つ間に、その与えられたものをもって励むようにと招かれる、と話された。

教皇は、このたとえ話における僕の 務めとは、才能を活かして「奉仕」 し、人生に意味を与えることと説 き、奉仕しない人生は生きる意味が ないと語られた。

福音書の中で、「忠実な良い僕」と呼ばれているのは、与えられたものを取っておくことなく、リスクを冒して努力した人たちである、と述べつつ、教皇は「善はそれに投資しないと、失われてしまうからである」と話された。

教皇は、キリスト者が守りの姿勢に 始終し、掟を守ることだけに専念し ているのは悲しいことと語り、これ を1タラントンを預かりながら地の 中に隠しておいた「怠け者の悪い 僕」の姿と重ねられた。

そして、主人から「悪い僕」とまで 呼ばれるこの僕は、実際には何も悪 いことをしていないが、何も善いこ ともしていない、と指摘された。 神の御旨に従って奉仕するにはどうしたらよいのか。これについ者のは、たとえ話の主人が怠け者の人が怠けた「わたしの金を銀行に入けた「わたった。そうしておけるで返してもらえたしてもら言葉に注目。わたしては、「恒久の利息を与えてしたの銀行とは、「貧しい人々」のことである、と説かれた。

貧しい人々はわたしたちに永遠の利益を保証し、すでに今から愛によってわたしたちを豊かにしてくれる、と話す教皇は、「闘うべき最も大きな貧困とは、わたしたちの愛の貧困である」と語られた。

このミサの説教で教皇は、奉仕に生きる多くの神の忠実な僕たちに感謝を述べながら、特にすべての人々の中にイエスを見出し、多くの貧しい人々に手を差し伸べたイタリア・コ

モ教区の故口ベルト・マルジェシー ニ神父を思い起こされた。

最後に教皇は、言葉だけでなく行い の伴うキリスト者となる恵みを神に 祈られた。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kyoko-aino-hinkon/ (2025/10/29)